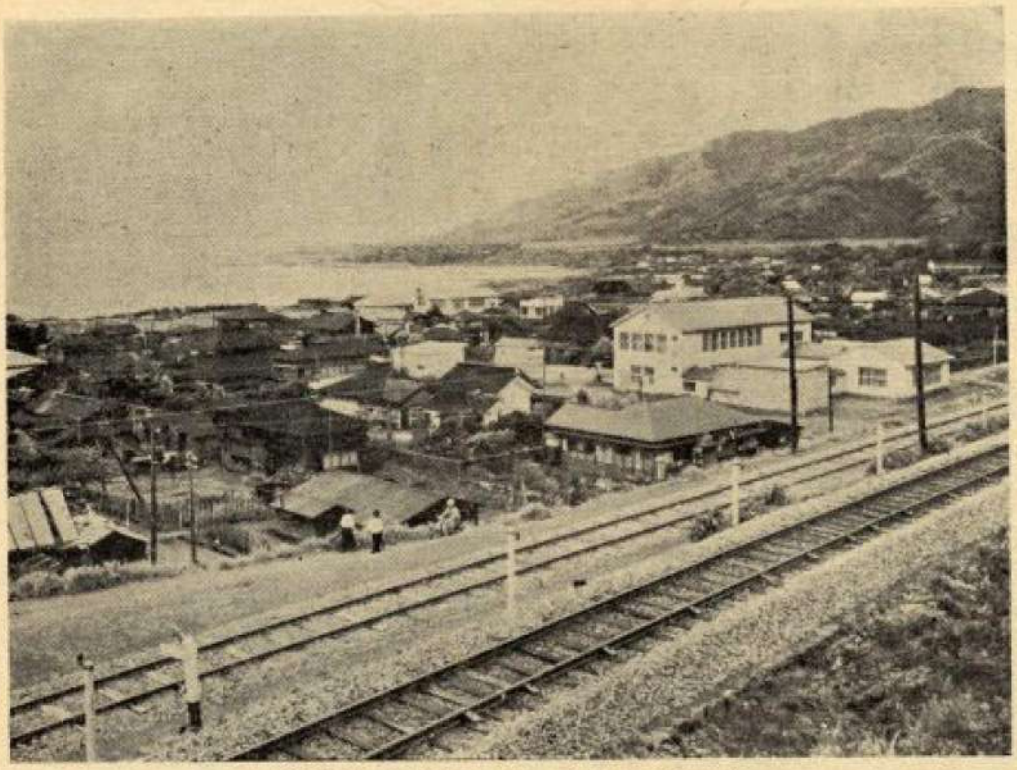
あきた（通巻3号） 1962年（昭和37年）8月1日発行

町村探訪 ③

ガスと水道のある県境の町

八森町



八森町の中心部から遠く八森漁港を望む

八森ハタハタの復活

〝いやあ、どうしたことか三年前からハタハタが豊漁でね、漁師はもとより町をあげて笑いがとまりませんよ〟とは八森町の助役須藤さんの弁。

秋田名物八森ハタハタ…の秋田音頭さながらにハタハタ漁でにぎわったのはもう大分昔のこと。昭和十四年の大漁が最後だったというから、二十年以上も忘れられていた大漁だったのだ。

戦後、沖合に出て底びき網でわずかばかりのハタハタをとるようになってからは、誰もが、もう昔のように岸で獲れることはあるまいと思っていたのだ。

それが三十四年の暮、何の前ぶれもなく突然おしよせたハタハタの大群で、この港町は夢かとばかり湧きに湧いたという。

二十年ぶりの海のボーナスで大喜びした三十四年に続いて、三十五年も大漁、そして昨年三十六年も大漁と三年間の大ヒットが続いたわけである。

昨年のハタハタ漁獲量は千四百トン三十六万貫で金額にして四千二百万円といわれ、これが十一月から十二月にかけて勝負がつくのだから漁師たちにはたまらない魅力であるわけ。

こうして八森ハタハタは二十年ぶりに名実共に復活したのである。

県境の町の感はない

山本郡八森町は、旧八森村、岩館村が合併してできた本県の町村合併第一号の町。人口七千九百人、日本海に面する本県最北端の町である。

この八森町へは五能線で行く。東能代駅から八森駅まで約四十分。乗客の大半が能代駅で下車するのと入れちがいに行商のガンガン部隊が整然と乗り込む。

これは八森町の隣り、青森県岩崎村から鮮魚や野菜を積み、能代市で加工商品と交換して行くのだが、彼等には県境という意識は全くない。あるものは同一経済圏としての関心だけなのだ。

現在八森町を中心に、青森県の深浦町、岩崎村と峰浜村、能代市の両県五市町村がガッチリと手を組み、二級国道一〇一号線（能代―青森間）の期成同盟会を結成して、現在猛運動を展開中だが、目指すところは北は深浦、南は能代までの同一経済圏の確立なのだ。

幸いにも中央へのはたらきかけが効を奏し、三十八年から一〇一号線の改良工事が始まる見通しということだが、青森の十二湖と秋田の岩館内にバス、トラックが運行するようになれば経済交流の活発化はもとより、観光地としての飛躍も大きなものと期待されている。

進歩的な浜っ子気質

五能線八森駅での会話である。〝汽車コさ乗ってどごさ行ぐなだ〟〝用あって八森さ行ぐどごだ〟―ちょっと聞いただけでなんでわざわざ汽車に乗るところなのかと思ってしまう。

しかしこれは町村合併にともなって駅名も変更したためで、つまり八森部落の駅は東八森駅（旧八森駅）、椿部落（役場所在地）の駅は八森駅（旧椿駅）というわけ。昔を知っている旅人はいささかとまどわざるを得ない。

これを町の人に聞いてみると「慣れてしまったからなんともない。役場所在地の駅名は、やはり町名と同一にした方が便利でしょう」と簡単にいわれた。

海辺のこの町の気質は、竹で割ったような性格、だから切りかえも早いのであろうか。

そのせいか町の各種公共事業にも思いきった積極が数多い。

格差のない文化生活

積極策の代表は燃料ガス。三十四年から町営ガス供給事業を始めたものだが、昨年から全世帯の薪代一万円に相当するカロリー分のガス供給網が完成した。

現在企業としては赤字だが、町民の生活向上のために役立てば満足と町の首脳部はいっている。これに加えて水道は全部落の毎戸給水施設が完備している。

秋田県内広しといえども、合併地域の全部がガス・水道施設完備という町村は、この八森町に限られるのではなかろうか。

また、ここは医療面でも恵まれている町。町営診療所が二つと開業医院が二つ合計四つの病院が地区別に開設されている。

国民健康保険の受診率が本県最高ということだから、住民が気軽に病院を利用していることの一つの裏付けでもあろう。

とにかく、全町の住民が、地域的な格差なく病院、ガス、水道を全く同じ条件で享受できるのは全くうらやましい限りである。

この町の教育に対する力の入れかたもすばらしい。「八森へ行った先生は転任したがらない」と関係者の間ではもっぱらのうわさ。

小学校三、中学校一、幼児学級と定時制高校が教育施設のすべてだが、ブロックモルタルのモダンな校長住宅や教員住宅も建てられ、岩館から八森へ通う中学生の通学費はすべて町費負担である。

県北の漁業センター

八森町の産業中、一番収入の大きなものは漁業。

八森、岩館、椿の三漁港からあがるタラ、サメ、マス、サンマ、ハタハタ、海草、貝など年間総水揚高は二百七十万㌔、金額にして年間二億円にもなる。

耕地の少くないこの町では、いきおい漁業振興に力を入れるのは当然のこと。昔とでは漁法もかわり、魚の来るのを待つのではなく、魚を探して獲る大型の漁法に変ったため、特に港内の掘削や防波堤の築造、漁礁の投入などに力を注ぎ、現在五年計画が終了し、さらに引きつづいて約一億五千万円の予算で八森漁港を整備し、県北の漁業センターにする計画を持つほど活発化している。

県境にあるチゴキ灯台（岩館海岸）

山から入る二千万円

八森町の産業上の大きな特色は町有林四千町歩の山林であろう。

明治三十五年の分収林制度が上手にいかされて、いまでは年間二千万円の収益が町財政をうるおしている。

「山の金が入るうちに山へ投資しておく」という点では完全な布石をし、植林も手ぬかりなく現在百七十ヘクタールの町営造林、五百ヘクタールの官公造林は、もう十年後には収益を上げるまでに成長している。

また林道開設もめざましく、三十六年度で五本完成、三十七年度も五本開設予定であり、その出来具合は国道並み、とご自慢の林道である。

こうして着々と進める山林計画によって、将来の財政には全く不安がないという健全財政ぶり。

〝先祖が作ってくれた山はありがたく、強力です。とにかくこの山林収入をバックに国の補助がつく公共事業ならどしどしやる計画です。いわば、わが町の将来への突破口は山林にあるといっていいでしょう〟須藤助役は山をもつ強みをこう話してくれた。

待たれる国道の完成

しかし八森町も良いものづくめではない。致命的な悩みは道路。国道とは名ばかりのデコボコ道で、それも岩館以北は自動車が通行できない状態にある。観光バスの走らない観光地である。

だから町内のいたるところで掘り出される天然ガスも町の発展のための無限のエネルギーでありながら、道路網が悪いため工場誘致もできないでいる始末。八森町住民がひとしく待望するもの、それは能代―青森間を結ぶ国道一〇一号線の改良工事が一日も早く完成することであり、これが八森町の産業経済発展を約束する鍵であるのだ。

まち・むら

八森町

—真瀬渓谷—

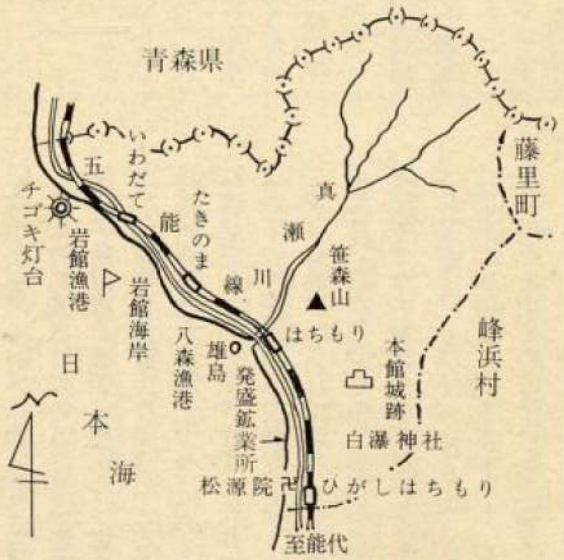
あきた(通巻171号) 1976年(昭和51年) 8月1日発行

海・山のさちも豊かに

―八森町―

八森の表玄関〝鹿の浦海岸〟。煙突は発盛鉱業所

合併　八森村　岩館村(昭和29年)
人口　6,314人
面積　112.09平方キロ



ハタハタによって全国的に知られる

「秋田名物、八森ハタハタ……」と、秋田音頭の真っ先に出てくる八森町は海岸ぞいの最北端にあって、冬にとれる魚ハタハタによって全国的に知られている。

八森という村名は八ッの森（山）の意という。菅江真澄遊覧記によれば、今からおよそ千年前の〈天慶七年八月の大地震で、多くの住家が埋没してしまったので、ここにあった村を温泉沢に移したところ、そこには八ッの森があったので八森というようになった〉と、記している。この八ッの森とは現在の大母爺森、小母爺森、大糠森、小糠森、相善森、狐森、鷲森、学森ではないかと土地の人は見ている。

また旧岩館村はその昔、南部の乱を逃れた須藤刑部左衛門が、いまの須郷崎付近で田畑をひらいたのがはじまりとされ、須郷の崎はその孫の名を取って〈有衛門崎〉とも呼ばれている。

その後、寛正年間（一四六〇～六五）に、岩館の小入川上流に銀山が発見され、約四百年にわたり採鉱が続けられ隆盛をきわめた。住家千数戸、寺八ヵ寺もあった、という記録が残されている。当時あった椿・岩館の二つの港は、漁港として利用されるほかに銀山への物資の輸送・漁獲物や食糧の移出入などにも活用され、秋田最北の港としても大いに役立っていたようだ。

明治に入ってからは椿鉱山が繁栄した。椿鉱山は現在の発盛鉱業所の前身である。明治二十年能代の呉服商工藤甚三郎によって発見され、三十九年には本格的な操業に入った。四十一年、産銀高が一万貫に達しいちやく日本一となり、従業員も二千人を数えたことが記録にある。しかし大正三年、鉱石の枯渇でついに休山となった。その後、買鉱を主として銅の精錬にあたるなどいろいろ変転はあったが、現在は硬鉛の生産が

続けられている。

鉱山とともに発展してきた八森町は他地域との交流がきわめて多く、それは陸上のみならず海上からも盛んであった。このことは、当然町民の意識を高め、教育熱心な町をつくりあげたものと思われる。

八森の古い歴史は、町内の各地から出土した多数の石器や土器がもの語るように、先住民族の竪穴居住に始まり、阿倍比羅夫の蝦夷討伐、慈覚大師による白瀑神社開基と続く。

八月一日の白瀑神社祭礼に行われる〈みこしの滝浴び〉は、県内でも珍しい行事として、多くの観光客を集めているものだ。

夏の風物詩〝みこしの滝浴び〟

農民一揆に由来の〝たいまつ祭り〟

白瀑の北方に八森町の起源といわれる本館部落がある。ここでは旧暦の八月十五日に、部落の人たちが総出でたいまつをともして、城跡に集まる〈たいまつ祭り〉を行っている。これは慶長年間、本館城主武田重左衛門の圧制にたまりかねた農民が、一揆を起こして落城させたことに由来する。

城主武田氏は、甲斐の武田信玄の一門といわれ、甲斐の天目山で敗れた重左衛門の一隊が能代の桧山にきたところを桧山城主に救われ、本館城主を命ぜられた。しかし、重左衛門は近村からあまりにも高い年貢を取り立てたため農民たちに反感を持たれ、慶長十年八月十五日（一六〇五）、村人百数十人が本館城を襲い落城させたという。

佐竹藩ではこれを農民一揆とみて、三十人余を処刑にした。本館部落には当時の農民の子孫が現在も住んでおり、たいまつ祭りは、この時の亡霊を慰めるために行われる行事である。

白瀑からバイパスに出ると、左手に、松林に囲まれてあるのが「松源院」。秋田市の曹洞宗補陀寺の末寺で、本館城主武田氏の開基による。現在の寺院は慶応二年（一八六六）に再建されたもので、玄関の天井には当時の著名な画人豊島俊素の〈十二支〉の絵がかかれており、また堂内には、狩野探昇斎の極彩色の五百羅漢像や十六羅漢像などが保存されている。

前庭には百日紅の大木もあり、観光客の目を引くのに十分な史跡だ。

北部中核漁港をめざして整備を促進

海岸部が十六キロにわたって続く八森町は、水産業による生産所得が高い。年間、およそ十四億円の水揚げがあり、町が水産業に寄せる期待の大きさも推しはかられようというもの。所得が多いことから若者の定着がみられ、働く人も意欲的であるという。

町では長い歴史に培われてきた漁業を将来の主産業に位置づけて、産業の振興を図ろうとしている。

現在アワビ、エビ、ワカメなどの養殖事業も盛んに行われているが、今後は〈とる漁業からつくる漁業〉をめざして、沖合深海漁場の進出、漁場の改良造成、大型魚礁の設置、船舶の近代化などが図られる。

八森・岩館漁港は県の第四次総合開発計画の中で、県北部の中核漁港として位置づけられており、将来は百トクラスの漁船が出入りできる港として整備される見込みだ。したが

▽ **白瀑神社**

ハタハタとともに八森町の名物とされているものに、白瀑神社の〈みこしの滝浴び〉がある。

伝説によると今から千数百年前、文徳天皇の仁寿年間（八五一～八五三）の始め、比叡山天台宗の開祖伝教大師の高弟である慈覚大師が、自ら刻んだ不動尊・釈迦牟尼仏・観世音菩薩・地蔵大師を、八森山の滝に祀ったのが白瀑神社の由来だとされている。

神社は東八森駅の東方、一キロのところにあって、その後方に、男滝と女滝からなる高さ二十㍍の白瀑が流れ落ちている。毎年、八月一日の祭典に、白鉢巻きに白装束の二十人あまりの若者にかつがれた〈みこし〉が、町内を回ったあとこの滝に入り、滝のしぶきで日常の汚れを落とし、家内安全、商売繁昌の祈願が行われる。

みこしが滝浴びをするという風習は、古くからあったそうだが、明治か大正か、年代は不明。みこしをかついで町内を回って神社に帰って来た時、あまりの暑さに、近くにある白瀑にみこしごと入ったのが〈みこしの滝浴び〉のはじまりだとか。

みこしが滝浴びをするのは、午前十一時から三十分くらい。また、白瀑神社の近くには尼子岩がある。

って、町でも漁港の整備促進には力を入れており、ことし、水産物の流通調整のための製氷・冷凍冷蔵倉庫が約二億円の予算で建設されることとなった。これはハタハタ、マスなど一時期に大量に獲れる魚の流通面

首長は語る

後藤茂司

八森町は総面積の九〇％近くが森林地帯を占め、農林漁業、鉱業商工業と各種の産業構成からなっていた地域で、よく秋田県の縮図だといわれました。

しかし、先年来、帝石油田や発盛製錬所の縮少、経営内容の転換などから、往時のような鉱工業への期待は年々減少し、また日本の高度経済成長地域の偏在によって転出者や出稼ぎ者が増加し、昭和四十六年度過疎地域の指定を受けております。

町としては、自然の立地条件と長い歴史に培われた漁業の振興に重点をおき、特に県北の漁業基地としての八森・岩館漁港を中心とした水産業の展開は、秋田県水産業に寄与するところ大なるものと考えております。

したがって今後は漁港の整備事業促進に力を注ぐとともに、水産物の流通調整並びに付加価値の増加を図って、本年度、北部漁業協同組合で建設予定の製氷、冷凍冷蔵施設の完成に期待しているところであります。

次に当町の農家経済とは密接な関係にある町有地への分収林制度は、制定以来六十有余年を経て、町財政への寄与とともに住民生活の安定に大きな貢献をもたらしており、この制度を設けられた先達の明に、感銘しておる次第であります。

しかし、林業経営の将来は必ずしも楽観を許さない状況にあり、今後は、総合的に検討した林業行政を考えていかねばと思っております。

当面の問題としては、老朽化危険校舎となった観海及び岩館小学校の改築事業の実施があります。一昨年開通した国道バイパスの山側に両校の建設地を求め、観海小学校には小・中学校への給食センター施設を併設し八月二十一日開校の運びとなっております。また、岩館小学校も、明年度早期開校を目指して、工事の着工を早める考えであります。

当町は「県立自然公園」として、その自然の景観や海岸美をもって知られているところですが、今後の観光とレクリエーションの展開を再検討すべきときにきていると考えられます。これらをふまえて、本町の自然条件を活用した将来に伸びる産業の振興と、生活環境の整備を図り、町民が助け合う社会づくりの展開に心がけ、住みよい八森町の建設を進めたいと考えております。

において大きな威力を発揮するだけに、その完成が待たれている。

農業は米づくりに依存しているが経営規模はきわめて小さい。一戸当たり、平均〇・五六㌶という農家が五〇％以上を占めている。漁業、その他の兼業収入による農家がほとんどだ。しかし、兼業形態をうまく取り合わせているので、暮らし向きは裕福だとか。この地方はかつて日本短角牛の主産地であったので、これをどう隆盛させるかが農業の課題となっているようだ。

町の農家をうるおしているものの一つに部分林制度がある。この制度は町有林地を町民に貸し、植林を振興するもので、伐採で得た収入は七・三の割で個人と町が分ける。伐採までの育林指導はすべて町が行う。明治三十六年から実施されている同町独特の制度である。

総面積九、五五七㌶のうち、公有地が約二、五〇〇㌶あるが、これを部分林制度によって活用し、大きな収入をあげているわけだ。こうして町の八五％を占める林野面積は、町財政上の大きな要点となっている。

植林で忘れてならないのは八植林の父▽日沼吉左衛門である。翁は五輪台、浄の上などの未開墾地二十㌶を切り開き、八森全山に私財を投じて植樹した。笹森山の頂上には、翁の功績をたたえる石碑が建てられている。

奇岩、怪石がつらなる岩館海岸

山と海と、豊富な自然の観光資源に恵まれている八森町には、年間四十万人近くの観光客が訪れている。とりわけ岩館海岸は、夏場は海水浴場としてにぎわう。長い海岸線には立岩、物見多門の穴、笛吹きの滝などと数々の伝説を秘めた奇岩、怪石がつらなり、またチゴキ無人灯台、県境の須郷崎などの名所や、南には雄島海上公園などもある。

いっぽう山峡には真瀬の清流が走り、春の山菜、夏のアユ釣り、秋の紅葉が趣をそそる。真瀬峡は延長約二十㌔。三十釜、黒滝、濁川スカイラインなど見どころが多い。

昭和三十九年に県立自然公園に指定されて以来、青少年のための教育キャンプ場や各種の施設が整えられ、健全で俗化されない、いわば家族ぐるみで楽しめる観光地づくりが進められてきた。

現在、通年観光的でない悩みを抱えてはいるものの、持てる資源の中で、人間の生活にうるおいを与える観光地をめざして、着実に伸びようとしている。

あきた（通巻277号）
1985年（昭和60年）6月1日発行

八森町　ハタハタ、銀山

秋田音頭の町

加賀谷　敏一

〝秋田名物、八森ハタハタ、男鹿では男鹿ブリコ、能代春慶……〟

本町は、秋田音頭の最初に紹介されるハタハタの名産地として全国に名高いところである。ハタハタの名前の由来は定かでないが、雷が鳴るころ沖から接岸して来ることから、「雷魚」と書くようになった。この時期の漁場は荒れ、時化を伴う。したがって、時化に来るから「波多波多」と呼ばれるようになったといわれている。

今では、その量も全国的な乱獲から激減し、地場産のハタハタは姿を消しつつある。これに代わって韓国産が食卓に上るようになった。浜がハタハタでにぎわったころは、いたるところで足の踏み場もないほどに浜を埋めつくし、網を起こす人、舟から荷揚げする人など活気にみなぎっていた。あまりのとり過ぎに、魚代が箱代を下回ったこともあり、沖止めすることもたびたびであった。このころ、町の住民はこぞってハタハタを求め、軒先に干し、また塩蔵するなど酷寒期の大切なタンパク源あるいは、酒の魚にしたものである。

八森漁港。県北の中核漁港として100トン程度まで係留できるよう整備されている

このほか本町を紹介するにあたり、鉱山町としての歴史がある。

寛政五年（一四六四）、川原の砂に混じった金銀から八森銀山が発見され、幕府の直山として隆盛を極めたころもあり、寺院が八つ、商人、職人などがあふれ、この銀山だけで総家数、一千軒を超えたという。

また、今でも町のシンボルとなっている高さ五十㍍の煙突があるが、これは明治二十一年に海岸の岩角から発見された椿鉱山を象徴するもので、大規模な露天掘りが行われ、明治三十九年には日本第一の銀山として従業員二千人を数えるほどであった。

昨年十月一日、町制施行三十周年を迎えた。昭和二十八年の町村合併促進法施行を機に、昭和二十九年、全県のトップを切って行われたもので、旧八森村、旧岩館村の合併による。

旧八森村は、菅江真澄遊覧記によると「文徳天皇の仁寿年間の初め、円仁大師によって作られた仏像を祭る宝塔寺が河堂村にあったが、天慶七年（九四四）の大地震で堂塔もろとも村の住家も倒れ、埋没してしまった。そこで、村を温泉沢に移したところ、辺りを見渡すと八つの森があったので八森という村名にした」と記されている。

眼前に大きくはばかる煙突、露天掘り跡。銀山町としての歴史を伝えている

一方、旧岩館村は、陸奥の武士、須藤刑部左衛門とその子、兵部が南部の乱を逃れ、岩館で田畑を開き住むようになったのが始まりといわれている。

秋田県の西部最北端に位置し、人口約六千人、面積百十二平方㌔。平坦地は極めて少なく、砂丘及び岩礁の続く海岸線十六㌔に沿って細長く集落が続き、約九割は山林・原野で占められている。西部は日本海に面し、北部は青森県、東部及び南部は藤里町、峰浜村と隣接している。

したがって、町の産業は恵まれた自然を生かした漁業、林業が基幹となっている。本町も他町村と同様に過疎化が急速に進行しているが、町の主役である若者を定着させるため、企業誘致、地場産業の振興には特に重点を置き、町民一体の振興策を展開しており、昨年は二社進出の運びとなった。今、町ではあらゆる可能性を求め、豊かな町づくりのために積極的な町おこしを進めている。

（かがや　としかず
八森町総務課広報担当）